

「蒲公英やいつも聞こえる母の声」

この句は、いつも傍にいてくれて蒲公英みたいに明るく、話を聞いてくれる母への感謝の気持ちを詠んだ句だった。母の日も近くすぐに見せたいと学校から家まで走って帰った。ところが、母はこの句を見て大笑いしてから言った。「いつも声が大きくて口うるさいのを恨んでいるの?」と。私も大笑いした。たしかに、私は、母を怒らせたなら「この世の終わり」と思っている。が、そんなことを直接言うほど馬鹿ではない。この後本当の意味を伝えると「ありがとう」と言ってくれた。普段は恥ずかしくて直接感謝を伝えられない私。嬉しかった。そして、たった一句で大笑いしたり、母子が心を通わせることができたことに驚いた。うれしいことに大好きな母を詠んだこの句は、飛騨俳句大会で念願であった初めての入賞を果たすことができた。

「風船やはち切れそうな恋の息」

これは、今春の俳句甲子園地方大会に於いてディベートで闘った句である。勝った瞬間の会場の空気まで甦らせてくれる。私の思い出の一句。風船がはち切れそうなくらいに、伝えたくても伝えられない思いがもどかしいという句である。この句を詠む時、風船でここまで句に広がりがあるとはいえない。同時に知ったことは、自分の思いや気持ちを五・七・五の俳句に込めれば人に伝えることができるということだ。俳句にしかないこの醍醐味に、私はますます虜になった。

人生には楽しいこと辛いことが沢山あるだろう。その時にしか詠めない俳句を詠むことで心をスッキリさせ、壁を力強く乗り越えるきっかけとしたい。これからの人生を俳句と共に歩んでいくことが私の夢である。

今春、飛騨神岡高校の文芸部に入り、素晴らしい仲間と先生に出会えたこの「縁」に感謝している。来年こそ俳句甲子園に出場し夏井いきさんと松山で会いたいものだ。

「月代や夢を叶える第一歩」